演　奏　に　つ　い　て

依　藤　里　子

はじめに

19世紀末から活躍した偉大な音楽家パブロ・カザルスの演奏について、検討を試みた。カザルスは、音楽と生活の真髄が人間性にあり、音楽と生活は、切り離すことが出来ないものであると考えた。このことは『カザルスとの対話』の冒頭で、次のように記している。

> 私が心ひかれるのは、音楽の持つ人間的内容であり、また私にとって音楽と生活とは、終生分かつことの出来ないものである[1)]。

と述べている。ここに、音楽の表現が人間性そのものとなり、聴衆を感動させる音楽となった。これが、カザルスの音楽であり、彼が偉大な音楽家の所以である。

そこで本稿では、カザルスの演奏者の役割、直観と知性の役割、テンポ、テクニックの役割の三項に留め小論となした。

Ⅰ．演奏者の役割

コレドール著『カザルスとの対話』は、弟子たちが晩年、次第に増える通信の仕事を手伝う傍ら、先生の思い出や意見等々、話されることを克明にノートにとり、のちに整理し出版された一冊の書物である。

本節では、この書物の中で見られるようにカザルスが演奏者の役割を、どのように考え、形成されたかを考察していきたい。

カザルスは、スペインのヴェンドレルの片田舎で生まれた。両親の影響を強く受け、父からは音楽への愛着の心を、母からは深い人間性を育み育てられた。バルセロナ音楽学校で学び、卒業後急速に進歩し、早くからチェリストとして名声を高めた。のちにトリオを結成し、カザルス管弦楽団設立に至った。スペイン内乱の後は、プラードに亡命、そこでプラード音

楽祭の基礎を築いた。1957年、カザルスのチェロ上級クラスの生徒マルタ・モンタニエスと結婚。その後も、世界各地で活躍を続けた。このような生涯に於て、カザルスは最晩年に幼少時代を振り返り、周囲には、小鳥の声、海の音等々、音楽が溢れていたことを回想した。このことは、音楽性の豊かさの表われであり、その上に、技術を克服し芸術と為したのである。カザルスの偉大さは、技術のみがひとり歩きしていない点であり、彼の音楽は、常に、内面にあふれる感情を表現することであった。この感情は、演奏者によりさまざまであるが、『カザルスとの対話』で次のように記している。

> たいせつなのは、私たちが心に感じることであって、それこそ私たちが表現する義務のあるものだ。たとえばバッハに関しては、私は自分にさしだされた前例や伝統を極力しりぞけて、良心的に、根気よく、私の感じ方に従って探求する務めを果たしてきたのだ[2)]。

と述べている。

それでは、演奏者の姿は、どのようにあるべきなのか。『カザルスとの対話』で次のように記している。

> 演奏家は、目の前にある楽譜を通じて、いわゆる客観性ではなくて、この楽譜を生み出した魂の変化に富んだ状態を再構成するように務めなければならないのである[3)]。

さらに、

> 演奏者は、望むと望まざるとにかかわらず、一個の通訳者であって、彼自身を通じてのみ作品を復元するのである。[4)]。

と言っている。このことをフルトヴェングラーの意見を引用してみると、

> 「……まず楽譜というものがある。それによって演奏者は作品を知るのである。作曲家は、楽譜を書くまえに、あるいは書きながら音楽に生きた意味を与えつつ《自分の音楽をつくった》のだが、演奏者はその道を逆にたどるのである。……」[5)]

と言っている。これは、演奏者が、「書かれたものを生き返らせることである」[6)] と言うカザルスの意見と同様である。

演奏者は、決して技術のみに終始するのではなく、作曲された曲を既成の事実にとらわれることなく作曲者の意図するところを探究し、内面にあふれる感情を表現して、これを聴衆に伝える。ここに、演奏者の果たすべき役割があると考える。

〈註〉

1）コレドール / 佐藤良雄訳『カザルスとの対話』白水社、1988年、8頁　6～7引用

2）同上、222頁　下2～6引用

3）同上、222頁　下19～22引用

4）同上、223頁　下11～13引用

5）同上、224頁　上8～12引用

6）同上、224頁　上22引用

II．直観と知性の役割

直観と知性は、どちらか一方丈ではすぐれた演奏とはいえない。そこで本節では、直観と知性両面の重要性について考えてみた。

まず、知性に頼りすぎた場合は、固定した観念でしか探究することが出来ず、方向を誤まる可能性がある。さらに、知性では理解出来ない作品については、演奏は困難となる。しかし、知性なくして解釈することは出来ず、知性があっての直観であるが、やはり直観が決定的な要素となる。このことは、『カザルスとの対話』で次のように記している。

> 確かに音楽では、容易さを与え、研究を深めるような練習というものがある。しかし例え知性が力強い助力者であっても、やはり直観がほとんどつねに、決定的な因子をなしている[7)]。

しかし、直観を大きな要素と考える場合も、楽譜を見てすぐに感じる時と、熟慮の末に感じるものとがある。これは、作品によっても変化する。結局、演奏者のもつ直観と知性との割合いによるのである。しかし『カザルスとの対話』で次のように記している。

> それが私の直観にもとづく信念から出るものか、それとも私の知性は直観に対して、うかがい知られる形を助けて音楽に実現するのにじゅうぶんだ、と信じているのか、それは言うことが出来ない[8)]。

とも言っている。『写真集カザルス ＜芸術と人生のパンセ＞』の中で次のように記している。

> すぐれた演奏とは、知性と直観とが織りなすものだ。演奏者はその曲の持つ意味を探り求めなければならない。それが見つかるのは、ただ正直さと謙虚さとをもってその曲に接したときだけだ[9)]。

と言っているように、解釈の上で直観と知性は、どちらか一方だけでは片寄った演奏となる。つねに、両面の割合いにより作曲者の深い意味を探究して演奏することが望ましいのである。

〈註〉

7）コレドール/佐藤良雄訳『カザルスとの対話』白水社、1988年、228頁　下6～9引用

8）同上、229頁　上10～14引用

9）フリッツ・ヘンリー/幾野宏訳『写真集カザルス ＜芸術と人生のパンセ＞』小学館、1988年

III. テンポ、テクニックの役割

昨今の傾向として、次第にテンポが速められてきている。このことは音楽の上だけでなく、日常生活においても同様である。しかし、時には、速度を速くし過ぎる傾向にあり、この結果、テンポの感覚を失いがちである。これは、一つには技術の進歩もある。そこで本節では、適切なテンポの決定および、テクニックのあり方について検討していきたい。この点について『カザルスとの対話』の中で、次のように記している。

> さて今日では、テンポの感覚をもっている芸術家たちは、そのテンポの感覚を失うか、少なくともそれを忘れてしまう危険がある。それにはいくつかの原因がある。楽器の進歩、演奏者の技巧の尊重など。現代の傾向は、最良の質とはいえないはでな成功を求めて、あらゆるテンポを出来るかぎり速めている[10)]。

とある。確かに、テンポが早くなればきらびやかさはある。しかし、テンポが速ければ速い程いいというものでもなく、作曲者が指示したテンポを根底に、演奏者の直観によって、適切なテンポが決められるべきである。『カザルスとの対話』で次のように記している。

> きまった法則はありえない。アレグロ、アダージオなどの語は指示に過ぎない。演奏者の音楽的直観が、この指示に適したテンポを見つけるべきなのだ[11)]。

と言っている。

技術については、年年進歩し、高度化した。特にカザルスは若い頃より、チェロの技術を修正してきた。これは、以前の奏法とは全く異なった方法であった。すなわち、身体の力を抜き、出来るだけ柔軟に保ち、余分な力を抜く奏法であった。『カザルスとの対話』で次のように記している。

> これらの修正の一つは、左手の伸長の利用を一般化することであった。これは演奏を容易にすると同時に音楽的に害となる手の移動を避けるのだ[12)]。

さらに、手についても、

> しなやかな手というならば、それはそう言えるね。私はそれで、いま話した指を大きく広げることが出来るのだ[13)]。

と言っている。手のしなやかさを保つ為には、手と腕をゆるめる時を把握することである。これにより、無理なく自然な方法で、しかも高度な技術が習得されるのである。しかし、技術はあくまでも手段であって目的ではない。高度の技術が要求されるのは、音楽の内面を伝える為である。

結局、テンポ、テクニックに於ても、演奏者の直観にまかせられる面が多く、作曲者の指示を見当に速度を決定し、持てる技術で内に溢れる感情を表現することが最大の役割である。

〈註〉

10) コレドール/佐藤良雄訳『カザルスとの対話』白水社、1988年、233頁　上7～13引用

11) 同上　下20～22引用

12) 同上、243頁　下16～18引用

13) 同上　下21～22引用

おわりに

本稿において、カザルスの演奏者の役割、直観と知性の役割、テンポ・テクニックの役割について検討を試みた。その結果、演奏者はまず楽譜を通して作品を知り、直観と知性により、作曲者の意図した内容や速度を探究して、内面にあふれる感情を表現し「生き返らせることである」[14]。そして、聴衆に伝える。これが演奏者の役割であると考えた。さらに、演奏者は常に、「ただ正直さと謙虚さとを持って接したときだけ曲の持つ内容を把握することが出来るのであって、楽譜や既成の事実にとらわれてはならない」[15] と言っている。これがカザルスの演奏であり、芸術である。

カザルスは、96年の永きに亘る生涯に於て、人間性が彼の生活と音楽を支えていた。幼少の頃、母親は、カザルスが優れた芸術家であると同時に、人間性豊かに成長していくことを望んだ。彼は、両親の影響を強く受けたこともあって、カザルスの生涯は、音楽家を越えたものとなったのである。ここに、カザルスの演奏は、聞く人に感動を与える生きる姿そのものとなった。アルベルト・シュバイツァーは、「語るべきものをもっている……。深味のある人間であるからこそ、かくも偉大な音楽家」[16] と称賛している。このようなカザルスは、私にとって、芸術の源泉であると考え、引き続き研究を続けていきたい。

〈註〉

14) コレドール/佐藤良雄訳『カザルスとの対話』白水社、1988年、224頁　上22引用

15) フリッツ・ヘンリー/幾野宏訳『写真集カザルス ＜芸術と人生のパンセ＞』小学館、1988年

16) コレドール/佐藤良雄訳『カザルスとの対話』白水社、1988年、15頁　下2～5引用

〈参考文献〉

1）ロバート・バルドック著 浅尾敦則訳『パブロ・カザルスの生涯』筑摩書房、1994年

2）『ラルース世界音楽人名事典』福武書店、1989年

3）『ラルース世界音楽作品事典』福武書店、1989年

4）ディヴィッド・ブルーム著 為本章子訳『カザルス』音楽之友社、1991年